

寶石泥棒

斎藤栄



中公文庫



中公文庫

ほうせきどろぼう
宝石泥棒

定価はカバーに表示してあります。

1998年2月3日印刷

1998年2月18日発行

著者 さいとう 斎藤 さかえ 栄

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA, INC. / Sakae Saito

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203070-6 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

宝 石 泥 棒

斎 藤 栄

中央公論社

目次

プロローグ

第一章	恋人と銀行
第二章	作戦と錠前
第三章	密偵と暗号
第四章	襲撃と梅雨
第五章	殺人と脅迫
第六章	六月と逃亡
第七章	発作と息子
第八章	虚偽と山岳

308	271	224	179	138	91	59	19	7
-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	---

第九章 湖水と事件

350

第十章 死者と溪流

373

第十一章 警察と病氣

412

第十二章 犯人と偽証

453

エピローグ

502

解説

影山莊一

517

寶石泥棒

1

旧赤坂離宮を改修して、「迎賓館赤坂離宮」とする工事は、総工費百四億円と六年の歳月を費やして、昭和四十九年三月三十一日、無事に終了した。

現代日本建築技術の粋を凝らして、コンクリート・鋼材から、天井絵画、シャンデリアなど、あらゆる部分に、最高の技術を注ぎ込み、金に糸目をつけなかったこの迎賓館は、見る者の目を奪う華麗な空間をつくりあげることになった。

イギリスのエリザベス女王を迎えたのも、この建物であった。

その後、多くの国賓と国賓待遇のVIP^{ヒッパ}が、この迎賓館に宿泊している。

ヨーロッパでは、平和な中立国として著名なアルゼット大公国の、メアリー大公妃とそ

の弟ジャン殿下が、五歳になる公女マリアンヌを連れて来日することになったとき、宿舍に充てられたのも迎賓館二階の宿所である。

大公自身の来日ではないが、大公妃の親善訪問なので、国賓待遇だった。

受け容れる迎賓館で、メアリー大公妃については特に配慮した事柄があった。それは、大公妃が有名な宝石^{ジュエリー・ホリック}狂で、豪華な衣裳はいうに及ばず、指輪、イヤリング、ブレスレットのたぐいに、高価な宝石を用いている点である。なにしろ、一点が、千万円単位のものはざらで、数億の装身具を持って来るというので、警備には神経をつかった。

政治的・思想的なトラブルは、ほとんど考えられないものの、メアリー大公妃自身が、^{パール・ド・ジュエリー}「宝石の塊り」なので、万一のことがあつては、日本の警察の威信にかかわるといふわけだ。そこで、大公妃一行の滞在する五日間は、警視庁のみならず、警察庁の宝石に詳しい国際刑事専門官までが、私服で迎賓館に詰めることになった。

こうした私服^{スリーツ}が、目立たぬように、迎賓館の庶務課員と連携をとりながら、厳重な警戒に当たったのである。

アルゼット大公国の一行のうち、国賓待遇になる大公妃、ジャン殿下、マリアンヌ公女の三名は、二階の国賓スイートの間、他は従者の宿泊室で、これは一階中坪に面した場所だった。

国賓スイートのすぐ隣りは、大サロンで、以前は〈朝日之間〉といわれた。これは主賓用サロンとして、公式の謁見に使われる部屋である。ノルウェー産の淡紅地大理石の円柱に挟まれた天井の大油絵は、「旭日ノ朝霞ニ昇リ桜花ニ映スル間ニ於テ神女カ玉馬ニ鞭チ香車ヲ駆ルノ図」といわれる。

香車というのは、黄金に輝く神の乗り物で、将棋の駒の香車は、ここからきているとか。サロンの前面に大ホールがあり、ここはフランス十八世紀末の様式で、南面の壁間には、ギリシャ産斑紋大理石がはり込められている。そこに小磯良平画伯の「音楽」と「絵画」という巨大な絵が飾られていた。

大ホールの前面に、吹きぬけの階段室があつて、すべてのVIPは、ここをのぼってレセプション・ルームなどへはいられる。

このほか、二階へ通じる階段は、正面に四カ所、後方に二カ所、別にエレベーターも設けられている。

メアリー大公妃来日の記事は、日刊四大紙に小さく報じられたが、あまり人目をひかなかった。大公妃は、アメリカ、オーストラリアへの旅の途中、天皇、皇后への親善訪問をする以外に、特別の公的な目的がなかったのである。

ただ、弟にあたるジャン殿下は、観光・農業のほか、これという産業のないアルゼッ

ト大公国で、なんとか鉄鉱生産を軌道に乗せたいという野心家であった。そのために、東洋の先進国である日本で、その方面のリーダーと腹藏ない意見交換をしてみたいと希望していた。

この希望を知った外務省当局では、業界トップの富国重工社長、古賀要之助こがようのすけに白羽の矢をたてた。たまたま、古賀の日程が、ジャン殿下の日程と都合よくマッチしたので、二人の会談は、迎賓館内小食堂でおこなわれることになった。ここはもとへ小宴之間せうしんといわれた場所で、フランス十八世紀末様式の飾り付けに加えて、木彫の美しい部屋である。

会談は、大公妃が来日して三日目に予定されていた。

その日までの公式行事は、すべてつつがなくすみ、迎賓館前、警備する警視庁、警察庁側、外務省関係者も、ホッと胸を撫なでおろし、ひとつのヤマバを過ぎた気のゆるみがあった。

そうしたときに、突然、予想もしなかった大事件が起きてしまった。

メアリー大公妃の所持する五十五 M C メイトルカラット（二 MC は二〇〇ミリグラム）もある絶世の逸品、サンシー（The Sancy）のダイヤモンドが、何者かに盗まれたというのである。

事件は、極秘のうちに数人の捜査担当者の手で取り調べられたが、大公妃自身の口から、盗難に遭ったのが、ペンダントの飾りの部分にあたるサンシーのダイヤモンドと知って、誰もが息を呑んだ。

それが真実ならば、（そして大公妃が嘘を言うはずもないので）盗難品の価額は、ほとんど評価できぬくらいの巨額に達するからである。

ヨーロッパには悲劇と伝説につつまれた宝石が幾つかあるが、このサンシーと名づけられたダイヤモンドも、世界の宝石史上に残る、謎につつまれた神秘の石であった。

いちばん古く、このダイヤモンドを所持していたのは、ブルガンデー公チャーレス・ゼ・ボールドだが、一四七七年ナンシー戦で戦死したとき、馬賊に掠奪され、ポルトガルに渡った。その後、フランスの男爵、ニコラス・ド・バーンを経て、一六〇四年、イギリス女王エリザベスの後継者ジェームズ1世に売却されている。それからヘンリタ・マリア皇后の手で再びフランスに戻り、一六六〇年サザリン大僧正のものとなった。一六九六年にジェームズ2世からルイ14世に売却されて以来、長くフランス王室の所有になっていた。

たといわれる。しかし、一七九二年の革命のときに、他の宝石とともに盗難にあったきり、行方不明だと称せられてきた……。

そのサンシーのダイヤモンドを、メアリー大公妃が所有していたのである。メアリーは、父君がイギリスのセント・バーモント公、母君はフランスの大貴族、ポンパドールの血をひく人だけに、サンシーを極秘に承継していても不思議ではなかった。

むしろ、今回の盗難事件のほうが、よほど不可思議だった。

なぜならば、サンシー・ダイヤの盗難は、警戒厳重な迎賓館の二階で、わずか数分間に発生した事件だからである。

前述のように、大公妃の随員二十名の部屋は、一階にあり、大公妃の主な装身具は、そこに置かれていた。が、ジュエリー・ホリツク宝石ばく狂のメアリー大公妃は、愛玩する貴重な宝石類は、大小五つの宝石函ばくに納め、自室（旧東御学問所）におかれていた。サンシー・ダイヤはそのうちのひとつになつていたのであるという。

盗難の状シチュエーション況は、次のとおりだった。国賓スイートの間には、マリアンヌ公女一人がおり、隣接の化粧の間には、ザイレン夫人という女性随伴員一名がいた。

その部屋の隣り、サロンへは、メアリー大公妃がお出ましになり、アルゼット大公国の新聞記者のインタビュウを受けていた。大ホールには警視庁の私服スーッ二名の目が光っていた

が、怪しい人物の通過を見ていない。

ほかに外部へ通じるのは、小階段と大食堂前へ続く通路だけである。小階段の下には、警察庁派遣の若手警視権藤兼次ごんどうけんじがおり、この権藤が守備位置を離れなかったのは、一階の廊下を警備ガードしていた別の警官によって立証された。

残された大食堂前の通路を、事件前後に歩いたのは、ジャン殿下と小食堂で会談するために来館した富国重工の古賀要之助社長と、それを案内した迎賓館庶務課員、桜井京蔵さくらいきやうぞうの二名だった。

盗難にあった品が、サンシーのダイヤ一点だけなので、犯人は計画的というよりも、出来心でもっとも大きな、目につくダイヤを猫ババしたものと推理された。残念なことに、犯人を目撃する可能性のあったマリアンヌ公女は「何も見ないわ」と、無邪気に答え、またザイレン夫人も、怪しい物音や人物に気がつかなかったというのであった。

盗難の事実が、早く確認されたのは、大公妃は、新聞記者に会う直前まで問題のダイヤを眺めており、函はこをそのままにしてサロンへ向かい、部屋へ戻ったとき、すぐに内容を調べたからである。

必然的に、嫌疑けんぎは、古賀社長と桜井京蔵の二名にかかった。

しかし、社会的な地位、名声、それにそのときの行動などからいって、古賀はすぐに容

疑からはずされた。そして、関係者の目は、いっせいに桜井京蔵に向けられた。桜井は五十五歳。実直で小心な事務官だが、状況は彼に不利だった。

その不利を決定的にしたのは、古賀社長の言葉だった。

「……小宴之間の角まで来て、わたしが、ご苦労さん、もう分かったからと言うと、桜井あのひとは右のほうへ曲がっていったようだった……」

これが正しいとすれば、案内役をつとめた桜井京蔵は、その直後に、なんの用もないのに国賓スイートのある方角へ、姿を消したことになる。

当然、古賀社長の言葉を根拠に、桜井は取調べを受けた。

桜井は強く否定した。

「いえ。私は正面の小階段からおりましたので、奥へは足を踏み入れておりません」つまり、古賀の証言とは正反対の主張をしたのである。

具合の悪いことに、桜井はその直後、迎賓館東門を出て、ホテル・ニューオータニへ事務連絡で出かけている。

桜井は最有力な容疑者として、徹底的に追及される羽目になった。

サンシー・ダイヤの盗難は、嚴重な報道管制の中で、新聞記者の勘づくところにならず、極秘な捜査が続いた。

容疑者、桜井京蔵がホテル・ニューオータニまで徒歩で出かけ、料飲部の山岡常男に会い、すぐに迎賓館へ戻るまでの足取りが、秒刻みで洗い出された。

この行程のどこかで、桜井は盗んだサンシー・ダイヤを警察の目につかぬ場所へ秘匿したものと推定されたのである。

しかし、本人は、頑強に無実を主張し、肝心のダイヤモンドの行方は、杳として分からなかった。

外務省、警視庁、警察庁では、緊急に秘密会議を開いて、事態の收拾策を協議した。このような不祥事は、まったく前例がないので、取り扱いに苦慮した。なにしろ、盗難品が、他の代替物でカバーできないサンシーのダイヤモンドである。

「……ひとまずここは、大公妃側の意向を確かめて……」

という意見が大勢を占め、とりあえず、外務省の法条清作事務次官が、急遽、迎賓館